

# “The Mysterious Stranger”

—その偽作から真作へ—

那 須 頼 雅

## 1

Mark Twain の最終作品として、われわれになじみの “The Mysterious Stranger” は、驚いたことに偽作であることが判明した。これは、実は A. B. Paine と F. A. Duneka とが謀って捏造した詐偽出版であることが明らかになり、批評界に大きな衝撃をあたえた。この作品が、多くの批評家たちに注目され、とりわけ、晩年の Mark Twain の思想を知る上で重要な位置を占めていただけに、その波紋は大きい。特に、この偽造犯人のひとりが今までの Mark Twain 批評形成の上に数々の輝かしい業績を残した Paine であることから、当然問題は深刻である。Paine の編纂に成る大著 *Mark Twain's Autobiography* すら信用していいのだらうかという危惧さえ生じかねない。

この作品は、そもそもその誕生のいきさつが mysterious であった。1910年に Twain が没し、その遺稿整理を一任された Paine が、始め “The Mysterious Stranger” の原稿群を見つけ、それから時をおいて、それらの中の一つを完結する結末章が単独で発見されたとして、1916年に、魔法使いの挿絵入りの “The Mysterious Stranger, A Romance” が彼の手で出版された。今にして思えば、不審な点が幾つかあげられる。たとえば、Bernard DeVoto が、彼の *Mark Twain's America* 執筆中、Twain のある種の遺稿の閲覧を申し出たが、Paine は頑として、それを承諾しなかったという<sup>1)</sup>し、また、

1) Bernard DeVoto, *Mark Twain At Work* (Harvard

1909年、Twain が “*The Mysterious Stranger* . . . could be finished easily almost any time”. . . .” と言ったというのに、それから7年も経過してやっと出された点などである。この遺稿管理が Mark Twain Estate の組織に移り、その責任者が Paine から DeVoto にかわったのが1938年春のことだが、この作品誕生に関する目ぼしい研究成果は現れなかった。しかし、DeVoto から Henry Nash Smith 教授の手に移るに及んで、この面の研究が一躍活発になった。たとえば、1952年には、E. S. Fussel が、この作品の構成の面から、その不自然さを指摘した<sup>2)</sup>、また、1962年には、E. S. Eby が dream 解釈の面からの研究を出し、その中で “...we have at least one separate last chapter and three manuscripts without certain evidence that Clemens regarded any one of them as a final version”.<sup>3)</sup> と述べ、その偽作の事実を暗に示した。そして、その翌年の1963年遂に、John S. Tuckey が、この作品にただよう mysterious な要素を本格的に調査することとなり、そこに用いられ、関係のある一切の原稿、資料、ノート

Univ. Press, 1942), Preface に次のように書かれている。

During the years when I was preparing to write *Mark Twain's America* I sometimes applied to Mr. Albert Bigelow Paine for permission to examine certain Mark Twain manuscripts. Mr. Paine always refused . . . .

2) E. S. Fussel, “The Structural Problem of *The Mysterious Stranger*” in *Studies in Philology*, vol. 49.

類を刻明に調べ、その紙質、インキの色にいたるまで綿密に検討した結果、“The Mysterious Stranger”とは、Paine と Duneka が共謀し、その原稿の一つ、“The Chronicle of Young Satan”を幹に、別の一つの原稿“ No. 44, The Mysterious Stranger”の結末章を「接ぎ木」に用い、さらに幾分それに手を加え、一つの完成作品のようにして出版したものであることをつきとめた。そして、この事実を、彼の *Mark Twain & Little Satan* なる書物にして公表した<sup>4)</sup>。それから6年を経過して、U. C. Berkelyを中心とした Mark Twain Papers の刊行計画に基づいて、William M. Gibson が *Mark Twain's The Mysterious Stranger Manuscripts* を著わし、Twain のこの作品に関する自筆原稿、資料、ノート一切を公けにした。事実上、この書によって、Paine, Duneka の欺瞞行為の全貌が明らかになったと言えよう。その序文で、Gibson は、Paine の行為を非難して、こう述べている。

Although Paine's loyalty to Mark Twain was great and his rich accumulation of data about Mark Twain's life in *Mark Twain: A Biography* will always be valuable, two facts must be recorded here. He altered the manuscript of the book in a fashion that almost certainly would have enraged Clemens, and he concealed his tampering and his grafting-on of the last chapter, presumably to create the illusion that Twain had completed the story, but never published it.<sup>5)</sup>

しかし、ここでは、この Gibson の Paine 批判にならって憤懣を並べたてたり、その欺瞞の手口をひとつひとつ発いたりするつもりはない。

3) E. H. Eby, “Mark Twain's Testament,” p. 255, in “*Modern Language Quarterly*, vol. 23.

4) John S. Tuckey, *Mark Twain & Little Satan* (West Lafayette, 1963).

5) W. M. Gibson, *Mark Twain's Mysterious Stranger Manuscripts* (U. C. Berkeley, 1967), p. 3.

“The Mysterious Stranger”が Mark Twain の作品ではないと実証された今、できるだけ早急にとり組まなければならない問題が他にあらからである。それは、この偽作事件が、今日までに築きあげられた Mark Twain 批評に、どう影響するのであろうか？ “The Mysterious Stranger”の偽作から真作へという転換点に立って、今われわれは、ほとんど大部分 Paine の伝記に基づいて形をなした Mark Twain 像、とりわけ、晩年の Mark Twain 像に、一体どのような手直しを加えなければならないのだろうか？ この小論は、こういった疑問へのひとつのアプローチである。

## 2

“The Mysterious Stranger Manuscripts”にはらった Twain の情熱と執念は、異常なまでに激しいものであった。Twain の中にもりつもつた思想、“philosophic obsessions”を、この一作にこめようと、1897年から1908年までの11年間にもわたる長い年月をかけて書きつけ、何回も訂正削除をくりかえしたものが、この manuscripts であった。この苦闘ぶりを Twain はふりかえって、こう述べている。

I rewrote one of my books, three times, and each time it was a different book. I had filled in, and filled in, until the original book wasn't there. It had evaporated through the blanks, and I had an entirely new book.<sup>6)</sup>

こうして書かれ、出版されずに残されたのが、Tuckey, Gibson によって明らかにされたように、“St. Petersburg Fragment,” “The Chronicle of Young Satan,” “Schoolhouse Hill,” “No. 44, The Mysterious Stranger”の4つである。これらは、いずれも未完作品であるが、先の Twain の言葉に基づいて臆測すれば、前の3つが Twain の意に満たず「蒸発」した残骸で、最後の“No. 44, The Mysterious Stran-

6) *New York Herald*, October 16, 1900; reprinted in *Mark Twain: Life as I Find It*, pp. 355-336.

ger”がその実りとして残った“an entirely new book”であると考えられる。Paineの犯した罪は、幾つかあげられようが、その最も大きなものは、先のGibsonの非難の言葉にもあるように、その残骸のひとつにすぎない“The Chronicle of Young Satan”を、これらの中での“the best edition”だと認定し、その末尾に“No. 44, The Mysterious Stranger”の結末章を「接ぎ木」(“grafting-on”)したことである。このことから当然生じてくる不自然さ、矛盾が、多くの批評家の判断を狂わせ、かれらを混乱におとし入れ、あげくは、誤ったMark Twain像を定着させる原因ともなった。それほどまでに、この「接ぎ木」部分は重要な意味をもっている。この偽作を偽作と知らずとりくみながらもFusselは、この結末章の重要性をみとめ、“Twain . . . must have had rather definite objectives clearly in mind as he wrote; what these goals were is revealed in the final chapter . . .”<sup>7)</sup>と述べた。このFusselの言う“definitive objectives”を正しく把握するためには、当然ながら、この結末章だけに基づく即断をつつしみ、この「接ぎ木」部分をとりもどし、50年ぶりの再生を果たした“No. 44, The Mysterious Stranger”全体から、この章の意味を解明していくことが肝腎である。

1899年、William D. Howells宛ての手紙の中で、Twainは、このmanuscriptsについて、こう解説している。

It is in tale-form. I believe I can make it tell what I think of Man, and how he is constructed, and what a shabby poor ridiculous thing he is, and how mistaken he is in his estimate of his character and powers and qualities and his place among the animals. . . . I hope . . . that it will turn out to be the right vessel to contain

all the abuse I am planning to dump into it.<sup>8)</sup>

これは、この作品をTwainの人間観、とりわけ、人間の卑小性、無知、不見識にふれる悪口雑言を盛りつける“the right vessel”にしようというTwainなりの意図の表示である。しかし、“St. Petersburg Fragment”, “The Chronicle of Young Satan”, “Schoolhouse Hill”と書かれ、長い歳月にさらされていくうちに、その強調が、人間非難におかれていたものが徐々にずれていって、その欠陥人間の創造主であるGod批判<sup>9)</sup>の上に移っていった。つまり、“No. 44, The Mysterious Stranger”の焦点は、むしろ人間否定へではなく、God否定を通じての人間肯定に向けられていった。

### 3

Twainの世界を特徴づけるものとして、HuckとTomを原型とする対照的な二つのselfの登場がある。

Often, on lazy afternoons in the mountains, I have lain on the ground with my face under a sage-brush, and entertained myself with fancying that the gnats among its foliage were liliputian birds, and the ants marching and countermarching about its base were liliputian flocks and herds, and myself some vast loafer from Brodignag waiting to catch a little citizen and eat him.<sup>10)</sup>

これは、Twainの初期の作品、*Roughing It*で

9) TwainのGod批判は瀕繁に見られるが、彼はGodを普通二通りに分けていることに注意を要する。Bible Godとreal Godの二つである。ここでは前のBible Godのこと。

In the dictation Twain stressed the difference between the Bible God and the real God, describing the former as vindictive, cruel, unjust, ungenerous, pitiless, vengeful, cruel, and a punisher of the innocent . . .

10) F. R. Rogers, ed., *Roughing It*. (Univ. of California Press, Berkeley, 1972), p. 54.

7) E. S. Fussel, *op. cit.*, p. 95.

8) A. B. Paine, ed., *Mark Twain's Letters II*, (New York, 1917), p. 681.

の空想世界で、まことに意気軒昂とした人食い巨人として Twain の Self がここに写し出されている。ところが、Twain の後期の作品 *Following the Equator* になると、こう変わる。

In Sydney I had a large dream . . . I dreamed that the visible universe is the physical person of God; that the vast worlds that we see twinkling millions of miles apart in the field of space are the blood-corpuscles in His veins; and that we and the other creatures are the microbes that charge with multitudinous life the corpuscles.<sup>11)</sup>

この God の血管の中で血球と争う「微生物」(microbes) としての自己認識は、時を異にして Twain によって抱かれたものとはいうものの、余りに違いすぎる。同じ作家にして、よくもこれほどまでに異なる自画像を心に描けるものだと、だれしも理解に苦しむかもしれない。しかし、これこそ、Twain が創造し、作家生涯を通じてずっと憑かれたように描きつづけた「双子」の Self である。

この「巨人」の Self を強くうちだす Twain を見れば、だれしも、明るい、楽天的な Mark Twain 観を抱くであろうし、God の体内に寄生する「微生物」の Self を強調する Twain を見れば、悲観と絶望の作家 Mark Twain 像が生まれるにちがいない。偽作の主要部分であった “The Chronicle of Young Satan” は、この後の「微生物」の Self を大写しに描くが、“No. 44, The Mysterious Stranger” は、これら「巨人」と「微生物」の両極の Self をあわせ描き、そこから一層次元の高い Self の存在を写し出している。言い替えるならば、この作品の主眼とするところは、いとも小さきものの中に、いとも大なるものを見、いとも大なるものの中に、いとも小さきものをみとめ、そこから、より高度な存在への到達である。このことを先づ、この作品の構成の面から見てみ

よう。

“No. 44, The Mysterious Stranger” の framework となる第一章と、最終章の第三十四章とは極めて重要な意味をもつ。この作品は、「場」(setting) の面から3つに分けられる。そして、その第一場が、第一章に描かれる Eseldorf の village, 第二場が、第二章から第三十三章までの中間章の “the Castle of Rosenfeld”, そして最後の第三場が、第三十四章の有名な結末章の描く void の世界である。これら3つの「場」, village, castle, void は、単に「場」としての意味をもつにとどまらず、主人公 August Feldner の心的発展段階を象徴的に示すものである。ここで結論的に言えば、この village と void とは August の「巨人」Self の場であり、castle は、彼の「微生物」Self の場である。

#### 4

第一場の village は、August の生まれ育った、Austria の真中に位いある静かな閑村 Eseldorf である。

Austria was far away from the world, and asleep, and our village was in the middle of that sleep, being in the middle Austria. It drowsed in peace in the deep privacy of a hilly and woody solitude where news from the world hardly ever came to disturb its dreams, and infinitely content. At its front flowed the tranquil river, its surface painted with cloud-forms and reflections of drifting arks and stone-boats; behind it rose the woody steeps to the base of the lofty precipice; from the top of the precipice frowned the vast castle, its long stretch of towers and bastions mailed in vines. . . .<sup>12)</sup>

この世俗の汚濁から解放されて、美しい自然のふところに抱かれ、ひっそりと満ち足りて夢にまどろむ Eseldorf の village は、世俗に染ま

11) M. Twain, *Following the Equator*, vol. 1 (Harper & Brothers, 1906), p. 132.

12) W. M. Gibson, *op. cit.*, pp. 35-6.

らず innocent のままの少年 August の姿である。Father Adolf, Catholic Church の下す厳しい戒律, 主義が, 子供たちには逆に幸いして, August をして, “Eseldorf was a paradise for us boys.” と懐古せしめる village である。

この August の「巨人」Self の夢幻境である village は, その鮮かな “dream-marks” の故に, 第三の void の世界と共通している。dream の世界とは本来 “unmoral” の世界である。次が, 第三場を説明する一節である。

“Nothing exists; all is a dream. God—man—the world,—the sun, the moon, the wilderness of stars: a dream, all a dream, they have no existence. *Nothing exists save empty space—and you!*”<sup>13)</sup>

このよく引用され, そして定って, 晩年にして Twain が経験した “a total destruction of the artist’s humanity”<sup>14)</sup>を示すと解説された一節は, 実は, August の超越した Self が到達する “paradise” の情景なのだ。August の Duplicate, Schwarz は, この「場」での自由を, “We wear no chains, we cannot abide them; we have no home, no prison, the universe is our province; we do not know time, we do not know space . . . .”<sup>15)</sup>と説明する。つまり, 上の “Nothing exists” とは, 完全な意味での “no chains” を意味しているのだ。この絶対唯我の世界は, 要するに, DeVoto の考えたように “symbols of despair”<sup>16)</sup>の世界ではなく, あらゆる束縛から解放された最大自由の境地にほかならない。これは, *The Innocents Abroad* の “I” の目指した「海」, *Roughing It* の greenhorn が進んで求めた「西部」, Huck にとっての「ミシシッピ河」に相応する世界なのだ。

これら「巨人」Self の登場する二つの世界の間, 第二場の castle の世界がある。これら

の自由で, 明るく, 和かで, 開かれた village, void の二世界とは全く対照的に, この世界は, 不自由で, 暗く, 騒乱に明け暮れ, 閉ざされた「牢獄」である。今や, それ本来の機能を果せなくなったこの castle は, 外敵に対してでなく, 内なるものの自由を奪い, 光をさえぎり, あげくは分裂に追いこむ「牢獄」である。まさに, これは, 先の Sidney の地でみたという Twain の大いなる夢での「微生物」の閉ざされた世界, そのままである。すなわち, この “the Castle of Rosenfeld” は, God および God のつくりだした人間をしぼるすべての “chains” を象徴する。

以上述べてきた3つの世界, village, castle, void を, Henry Nash Smith 教授の言葉を借りて表わせば, Hannibal 世界, Hannibal 世界の崩壊, Hannibal 世界の復元となる。これを, さらに, この “No. 44, The Mysterious Stranger” に示される3つの Self をくみこんで図式化すれば, 次頁の図になる。

この dream の世界——reality の世界——dreamの世界という August の遍歴を示す「馬蹄形パターン」(horseshoe pattern) は, 実に重要な Twain 思想の具象である。一言に言えば, village において innocent そのものであった August が castle の分裂作用をうけて Waking-Self と Dream-Self の双子の境涯を経て, そこから始めて Soul<sup>17)</sup>に到達できるというもので, これは実に明るく健全な人間肯定の哲学を示すものである。

## 5

ここまで, “No. 44, The Mysterious Stranger” の構成の面から, この作品の “Nothing exists” の最終章の意味を考察してきた。これから, 視点を内容の面に変え, 先にふれた3つの Self の面から, この最終章の含む象徴的意

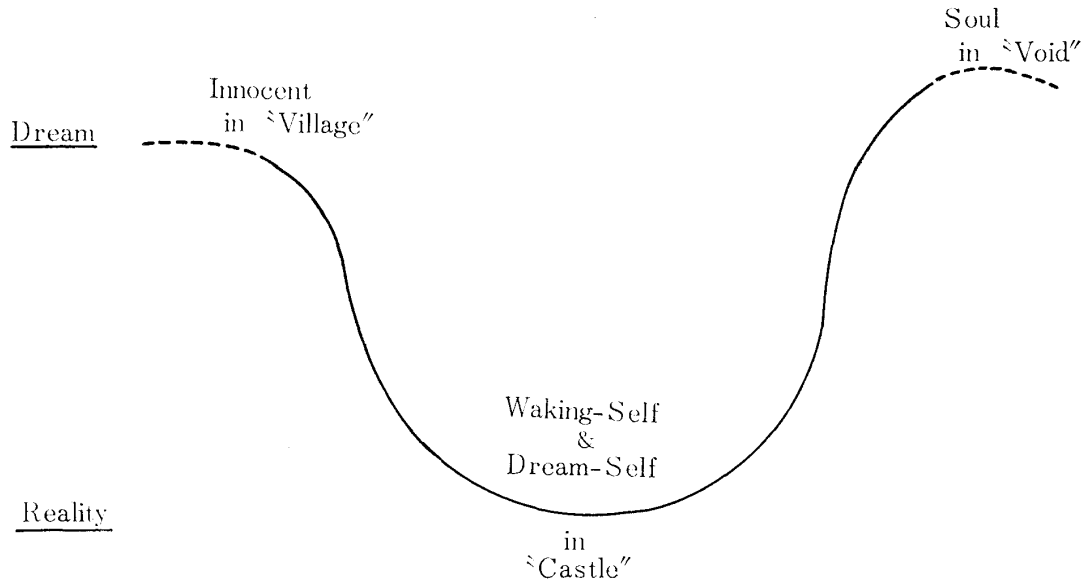
13) *Ibid.*, p. 404.

14) E. S. Fussell, *op. cit.*, p. 104.

15) W. M. Gibson, *op. cit.*, p. 370.

16) B. DeVoto, *op. cit.*, pp. 105-130 を参照。

17) Soul について Twain は “Pudd’nhead Wilson’s Calender,” *Following the Equator*, XXIII, p. 227 でこう言っている。“Be careless in your dress if you must, but keep a tidy soul.”



味を考えてみよう。

すでに述べた如く、castle は God および、God のつくった人間束縛のすべての“chains”を象徴的に示す。これは、Huck にとって、Widow Douglas の家がそうであったし、また、*Connecticut Yankee* の Hank にとって、Arthur 王、Morgan La Fay の宮廷がそうであったのと同様である。そして、その重圧の下に苦しみ、遂に分裂を起すことを読者に予知させるために、この世界を明白な二重構造で特徴づけている。つまり、“mouldering to ruin”, “a stanch old pile”<sup>18)</sup>などと説明される castle の古さと、“a new art, being only thirty or forty years old, and almost unknown in Austria”<sup>19)</sup>という、当時発明間もなかった印刷技術を誇る print-shop の斬新さとは、不自然なまでに対照的である。この鮮かな新・旧の対照が、そのままちこまれて、この castle の世界を二分している。“We were a mixed family.”<sup>20)</sup>という August のこの世界の紹介は、この print-shop のマスター Heinrich Stein と、その妻 Frau Stein との両派の分裂を意味する。この夫婦は、余りにも違いすぎ、両極端を示すことは、次の August の説明で明らかである。Heinrich

Stein について August はこう書いている。

My master, Heinrich Stein, was portly, and of a grave and dignified carriage, with a large and benevolent face and calm deep eyes—a patient man whose temper could stand much before it broke. His head was bald, with a valance of silky white hair hanging around it, his face was clean shaven, his raiment was good and fine, but not rich. He was a scholar, and a dreamer or a thinker, and loved learning and study, and would have submerged his mind all the days and nights in his books and been unconscious of his surrounding, if God had been willing.<sup>21)</sup>

これに対して、August の眼に映じた Frau Stein の姿はこうだ。

She was well along in life, and was long and lean and flat-breasted, and had an active and vicious tongue and a diligent and devilish spirit, and more religion than was good for her, considering the quality of it. She hungered for money, and believed there was a treasure hid in the black deeps of the castle somewhere; and between fretting and sweating about that and try-

18) W. M. Gibson, *op. cit.*, p. 229.

19) *Ibid.*, p. 229.

20) *Ibid.*, p. 230.

21) *Ibid.*, p. 230.

ing to bring sinners nearer to God when any fell in her way she was able to fill up her time and save her life from getting uninteresting and her soul from getting mouldy.<sup>22)</sup>

ここに歴然とした contrasts——容姿、性僻、趣味における相違にもまして重要なものは money と death に対する態度である。“Money is God.”<sup>23)</sup>を信条とする Frau Stein と、Soul に生きる Heinlich Stein の相違である。このどうしようもない分裂が、No. 44 という Young Satan の出現によって、より明瞭に、より深刻に、露呈する。すなわち、No. 44 が、まるで迷い鳥のように、この castle の世界に入りこんだことがきっかけとなり、このよそ者の取り扱いをめぐる深刻な対立関係が生じる。Frau Stein を筆頭にする、この No. 44 に対して激しい拒否反応を示す側、そして、それと対照的に、Heinlich Stein, Katrina 等の No. 44 を喜び迎えようとする側との二つに分裂する。この分裂が、外面から内面にまで滲透し、内部分裂を生じた結果、Waking-Self と Dream-Self の出現となる。これは、醜い抗争の結果、この castle が “lunatic asylum” となり、そこでの生活が “cat-and-dog’s life” におちいったその危機的状況を打開する最後の手だてとして No. 44 が考え出したものである。これについての説明はこうだ。

You are not one person, but two. One is your Workaday-Self, and ‘tends to business, the other is your Dream-Self, and has no responsibilities, and cares only for romance excursions and adventure. It sleeps when your other self is awake; when your other self sleeps, your Dream-Self has full control, and does as it pleases. It has far more imagination than has the Workaday-Self, therefore its pains and pleasures

are far more real and intense than those of the other self, and its adventures correspondingly picturesque and extraordinary. As a rule, when a party of Dream-Selves—whether comrades or strangers—get together and flit abroad in the globe, they have a tremendous time. But you understand, they have no substance, they are only spirits. The Workaday-Self has a harder lot and a duller time; it can’t get away from the flesh, and is clogged and hindered by it; and also by the low grade of its own imagination.<sup>24)</sup>

これら二つの Self の性格、評価について、この No. 44 の説明は、かなり明瞭である。つまり、その自由奔放さにおいて、その想像力において、その享樂の度合いにおいて、Dream-Self は Workaday-Self (あるいは Waking-Self) より、はるかに優れている。ところが、この Dream-Self にも、それなりの悩みをもっている。August の Dream-Self である Schwarz が、magician に扮した No. 44 に、自らの願いをかなえてくれるように切々と訴え、次のように言っている。

“Oh, free me from *them*; these bonds of flesh—this decaying vile matter, this foul weight, and clog, and burden, this loathsome sack of corruption in which my spirit is imprisoned, her white wings bruised and soiled—oh, be merciful and set her free! . . . .<sup>25)</sup>

つまり、この言葉に示されるように、Dream-Self も所詮、flesh のとりこであり、flesh の奴隷にすぎない。この flesh の「牢獄」から逃れる道はただ一つ、Soul の世界への参入だけである。いわば「昼」の Self の Waking-Self、そして「夜」の Self の Dream-Self から超越して、timeless の存在 Soul に到達する道である。

22) *Ibid.*, p. 230.

23) “The Revised Cateceism,” published in the *New York Tribune* on September 27, 1871.

4) W. M. Gibson, *op. cit.*, p. 315.

5) *Ibid.*, p. 369.

その至高の存在 Soul を No. 44 は、こう説明する。

Each human beings not merely two independent entities, but three—the Waking-Self, the Dream-Self, and the Soul. This last is immortal, the others are functioned by the brains and the nerves, and are physical and mortal . . . .<sup>26)</sup>

これこそ、“the life eternal”の世界であり、「時間」, 「場」, God から完全に解放された自由の極致である。これが、“No. 44, The Mysterious Stranger”の結末章の世界の意味である。

こうして辿られる「Augustの統一」——「分裂」——「統一」のパタンは、「Huckの生」——「偽装死」——「再生」のパタンについて言える如く、否定を超越した建設の精神を示すものである。このサイクルはただ一回きりのものではなく、つぎつぎに果てしなく続くことを余韻の形で示している。1882年、Twainは汽船に乗ってミシシッピ河を下った旅を、こう描いた。“ . . . . the days goes, the night comes, and again the day—and still the same, night after night, and day after day — majestic, unchanging sameness of serenity, repose, tranquility, lethargy, vacancy—symbol of eternity, realization of the heaven pictured by priest and prophets. . . . ”<sup>27)</sup>この悠久の流れにひそむ静止、変転の中の不動、realityの混沌からのdreamのまどろみ、これが、そのまま、このAugustの成長パタンの意味である。

## 6

歴史が人間を変える。アメリカに自由地が消滅し、無尽蔵を誇った天燃資源にも限界のあることを知り、永遠の発展の夢がくずれかけていたPaineの時代にあっては、挫折を知らないMark Twainを強調するよりも、西部の pocket-

miner さながらに、栄光の座を占めたのも東の間、絶望の淵に転落していったMark Twainを強調して伝える方が、Paineにとってみれば、より適切であると考えたようである。しかし、Twainは人間の成長発展を執拗に信じ、それを阻むものに対して容赦するところがなかった。これを支える信条は、

We change and must change constantly, and keep changing as long as we live. What then is the true gospel of consistency? Change.<sup>28)</sup>

という、すこぶる明快なものであった。しばしば非難的となったTwainのpot-boilerぶりに関しても、Twainは正直にこれを認め、それからの転向を決意して、次のように述べた。

For several years I have been intending to stop writing for print as soon as I could afford it. At last I can afford it, and have put the post-boiler pen away. What I have been wanting is a chance to write a book without reserves . . . .<sup>29)</sup>

また、彼の本の読み方も、その例外ではなかった。よく歴史書を読んだが、なかでも、Carlyleの*French Revolution*はTwainの愛読書であった。それについて、彼はこう述べた。

How stunning are the changes which age makes in a man while he sleeps. When I finished Carlyle's *French Revolution* in 1871, I was a Girondin; every time I have read it since, I have read it differently—being influenced and changed, little by little, by life and environment . . . ., and recognize that I am a Sansculotte!—and not a pale, characterless Sansculotte, but a Marat. Carlyle teaches no such gospel: so the change is in me—in my vision of the evidences.<sup>30)</sup>

26) *Ibid.*, p. 26.

27) M. Twain, *Workings XII* (Harper & Brothers, 1906), p. 225.

28) *Mark Twain Speeches*, p. 121.

29) A. B. Paine, ed., *Mark Twain's Letters*, II (New York, 1917), II, p. 681.

30) *Ibid.*, p. 490.



また、Twainの晩年にふりかかった数々の忌まわしい事件から、悲観思想家 Mark Twain をよくひきだそうとしてきたが、これも説得力に乏しいと言わざるをえない。なぜなら、娘 Clara が嫁いで淋しくなれば、Twain は、“it was hard but I could bear it, for I had Jean left.”<sup>31)</sup> と言って、彼なりの脱出口を見出したし、また、この唯一の望みの綱であり、彼が愛して止まなかった Jean が病魔に倒れ、彼を置き去りにした時も、“my life is a bitterness, but I am content: for she has been enriched with the most precious of all gifts—that gift which makes other gifts cheap and poor—death.”<sup>32)</sup>

と述べて、悲歎を克服した。また、この同じ悲劇の時の自分をこうも表現した。

“Shall I ever be cheerful again, happy again? Yes, and soon. For I know my temperament. . . . My temperament has never allowed my spirits to remain depressed long at a time.”<sup>33)</sup>

Twain は、動きに動き、進みに進み、その行くてを阻むものがあれば、それに飽くまで挑戦し、

death ですら、その例外ではなかった。

. . . . death was sweet, death was gentle, death was kind; death healed the bruised spirit and the broken heart, and gave them rest and forgetfulness; death was man’s best friend; when man could endure life no longer, death came and set him free.<sup>34)</sup> この異常なまでの屈託のなさ、不撓不屈の vitality をそなえた永遠の旅人こそ、Mark Twain の真の姿である。この真の姿をつかむ第一歩は、Twain に pessimist とか optimist とかのレッテルを安易にはることをせず、彼の言葉を先入観なしに素直に正しく読みとることである。われわれに Twain はこう述べているのだ。

Pessimists are born not made; optimists are born not made; but no man is born either pessimist wholly or optimist wholly, perhaps; he is pessimistic along certain lines and optimistic along certain others. That is my case.<sup>35)</sup>

December 2, 1974

(この小論は、1974年10月12日東北大学で催された第13回アメリカ文学会全国大会において発表したものに加筆、訂正を施したものである。)

31) Darrel Abel, *Mark Twain* (Great Neck, New York, 1964), p. 103.

32) *Ibid.*, p. 104.

33) Hamlin Hill, *Mark Twain: God’s Fool* (Harper & Row, New York, 1973), p. 258.

34) *Ibid.*, p. 258.

35) A. B. Paine, ed., *Mark Twain’s Letters*, II, p. 785.

(同志社大学商学部教授)